

[原著論文]

*Persuasion*におけるヒロインの場所移動に関する考察  
—“nobody”であることがもたらすもの—

池田 容子

山陽小野田市立山口東京理科大学 共通教育センター

**The Impact of Spatial Transitions on the Heroine of *Persuasion*:  
What is Brought by Being “Nobody”**

Yoko IKEDA

Center for Liberal Arts and Sciences, Sanyo-Onoda City University

**Abstract**

In this paper, I will analyze how transitions of place and location impact the ways in which Anne, the heroine in Jane Austen's novel *Persuasion* (1818), realized her true self, showed her merit and became empowered to behave in the ways she desired. She was not “nobody” at all although her own family members regarded her as a person whose word had no weight; whose convenience was always to give way. The paper notes how key turning points in the heroine's life take place not at home but at other locations. The farther that she goes away from home, the more descriptions of her actions appear in the novel. Since most of her family members were not helpful, there was no other way for her to reach her goals except by leaving home and heading elsewhere. This spatial transition can therefore be regarded as an important factor in the heroine's success.

In the conclusion, the following three points are emphasized: (1) Anne had the willpower to go forward until she reached her goal; (2) although she was from baronet family, she got along well with people around her regardless of their social ranks; and (3) her actions and movements would likely continue even after she entered a different social rank to the one that she originally belonged to.

**Key words:** nobody, transition, action

キーワード: 誰でもない, 移動, 行動

## 1. はじめに

Jane Austen (1775-1817)の6つの完成した作品の中で、*Persuasion* (1818)は場所の移動が特に多く扱われている。Le Fayeが“ladies did not travel far from home without the protection of a male companion.”<sup>1)</sup>と指摘するように、当時の女性たちは通常単独で、自分が望む通りに移動しないものであった。このような慣例にもかかわらず、この作品の主人公であるAnne Elliotは、オースティンの他の5つの作品中のヒロインと比較した場合、より多くの場所を訪れる上、より多くの種類の人々と交流している。また、この作品においては、ヒロインの結婚でハッピーエンディングを迎えるという設定が用意されていない点、そして、この先に不安が生じる可能性もあることが暗示されているという点も、他の作品と異なる。実際に中尾による研究のように、様々な場所への移動を通してヒロインの美点が確認されることに着目したもの\*<sup>1)</sup>は多いが、なぜ或る場所への移動が必要であったのかということや、なぜその場へ辿り着くことが可能であったのかということに言及する研究はあまり多くないように思える。したがって、本稿では「場所」そのものの持つ重要性や意味について注目したい。オースティンの示す公的、私的空間に関して大石は、「男性と女性との間には、ジェンダーによって厳密に差異化された社会空間が存在するようであり、それではとらえきれないグレイ・ゾーンが広がっている。」<sup>2)</sup>と述べている。これを、社会的慣習に沿いつつも、必ずしも厳密ではなく、緩やかに規範を解釈したり、或いは無視したりすることができると思えば、アンの空間移動や行動においても、同様にグレイ・ゾーンを利用し、流動性を生み出すものが存在するのではないだろうか。

下記のJordanの主張が示す通り、確かにオースティンは19世紀の社会制約の下でアンを行動させてはいるが、代わりに、状況を好転へと導くチャンスや、逞しさを彼女に与えている。本稿ではこれらの点に着目し、ヒロインが自分の在るべき場所へ到達するまでの過程を考察する。

Austen cannot give Anne the freedom to move of twentieth-century women, but she certainly represents the acute frustration of a woman in the early nineteenth century who cannot act boldly and independently to express her desire without disapproval, which include that of the man she loves.<sup>3)</sup>

## 2. 心が向く方向

物語の始まりにおいて、アンの居場所は無いに等しい状態であった。川口をはじめ、多くの研究で指摘される\*<sup>2)</sup>通り、ヒロインであるにもかかわらず、アンは存在感が希薄で、第2章になってようやく登場する人物である。しかし、これは家族からの評価を反映したものであり、真の姿ではない。家族以外の人々との交流が増すにつれ、彼女のとる行動は注目され、それらの人々からの評価が示される。移動に伴い、アンの真価が発揮され、認められる場面が増していく。上記引用の表現をもとにすると、アンの行動に対し人々が“approval”を示す場面が増していく。家族内には彼女を理解する者はいないため、家族と共に在る場所は、彼女の在るべき場として適していないことは明らかである。したがって、そこから離れ、自分にふさわしい場へと向かう必要があると言える。下記引用が示す通り、彼女を正しく理解してくれる人々と出会わない限り、アンは現状から抜け出すことは不可能なのである。先のJordanの主張を逆手に取ると、“approval”を示されるのならば、大胆に自立した行動をとることが可能であると言える。

...Anne, with an elegance of mind and sweetness of character, which must placed her high with any people of real understanding, was nobody with either father or sister: her word had no weight; her convenience was always to give way; -- she was only Anne.\*<sup>3,4)</sup> (7)

まず、移動に関しては、家計が困難を来したために、より経済的に住まえる場所へと一家で転居する必要が生じたことが発端となっている。すなわち、転出をきっかけとして、アンは今まで経験することのなかった目新しい状態・状況に遭遇する機会を得たのだ。これまでの住まいであったKelynych Hallは、新しい借り手であるAdmiral Croft夫妻に渡り、早速クロフト提督自らの手による扉の修繕が施された。

That has been a very great improvement .... Mr. Shepherd [Anne's father's lawyer] thinks it the greatest improvement the house ever had .... the few alterations we have made have been all very much for the better. (114)

ただ僅かばかりの扉の修繕に過ぎないにもかかわらず、今までの屋敷の状態がいかにも不便であったかということは、“a very great improvement,” “the greatest improvement,” “all very much for the better”という連続した表現からも明

らかである。また、この屋敷自体も、極僅かな修繕すらできない無能な住人よりも、より良い居住者を得たということになる。この改良は、アンがケリンチ屋敷に住んでいた際には、決して目撃し得なかったことである。修繕する必要があるにもかかわらず、それを放置した状態が続いていたという事実は、改善を先延ばしにして、その可能性から眼を背けている状態であるか、または、改善する必要性にそもそも気付くことができていなかったことを意味する。すなわち、屋敷に留まることはアンにとって、この先何も起こらない停滞状態が続くのみであることを暗示していると考えられることができるのではないだろうか。実際に、屋敷内の微細な改良を目の当たりにして以降も、アンは移動や行動の都度、より良い方向へと変化したものや状況に出会う機会を得ている。

一方、クロフト夫人についての記述からは、夫と似た夫人の性質を認めることが可能である。以下は、夫が操縦している馬車の手綱を取り、夫人自らが危険を回避する場面である。“by ... giving ...”や“by ... judiciously putting out her hand...”という表現を通し、夫人が他人に頼らず次々と適切な状況判断を行いつつ、手際よく自力を行使し、状況を好転させている様子が描かれている。

...by coolly giving the reins a better direction herself, they [Admiral and Mrs. Croft] happily passed the danger; and by once afterwards judiciously putting out her hand, they neither fell into a rut, nor ran foul of a dung-cart.... (83)

扉の修繕と併せ、この場面の描写は、クロフト提督夫妻は共に自ら判断し、自らの手で“a better direction”へと変更を試みることのできる人々であることを示している。更に、“happily”という表現が添えられていることから、提督は夫人のこの行為を不快には思わず、良いことであると見なしており、夫妻はお互いを認め合っていることが伺える。二人の間には、お互いの行動様式に関する“approval”が存在すると言える。同時に、“approval”があるからこそ、夫人は大胆かつ自立した行動をとることが可能であることも明確に示されたことになる。“They [the Crofts] were people whom her [Anne’s] heart turned to very naturally.” (145)と述べられている通り、アンはこの夫妻に対し好意的な印象を抱いている。“very naturally”という表現が用いられていることから、好意の度合いが高いことは明らかである。

Lyme RegisでCaptain Harville宅を訪れた際にも、アンはハーヴィル大佐に対し同様の反応を示す。クロフト夫妻とハーヴィル大佐の3例を眺めることにより、彼女が好まし

いと捉える人々の傾向を伺うことができる。次の描写は、ハーヴィル大佐宅内部を見たアンの印象を示したものである。

...the sight of all the ingenious contrivances and nice arrangements ...to turn the actual space to the best possible account, to supply the deficiencies of lodging-house furniture.... (88)

住まいの狭さや不足分は、工夫を施すことにより補われている。“the ingenious contrivances and nice arrangements”という記述が示す通り、この状況が肯定的に捉えられていることは明らかである。ケリンチ屋敷の新しい居住者の場合と同様に、もとの都合のよろしくない状態に手を加え、改善を施している。クロフト夫人の馬車操作も併せ、これらは、ものごとをうまく状況に合わせて制御する、海軍軍人たちとその妻の有能さを示している。ケリンチの屋敷を維持することが困難であったアンの家族と海軍軍人は、対照的な存在である。また、物事を望ましい状態へと変化させるべく手を施すことを、アンは好ましいと捉えていると読み取ることが可能である。同時に、彼女はこのような行動ができる人たちを理解し、認めている。この作品において、「自力で動き、変化をもたらすこと」は、重要視されていると言える。

以上、いくつかの肯定的イメージの表現を手掛かりにすることにより、*Persuasion*におけるヒロインが、好ましいと捉えるものを眺めてみた。これらをもとに、ヒロインが向かう場所、或いは、彼女が本来属すべき場所を追究する。

### 3. 人的交流による変化

結婚を約束していたWentworthと別れた後の8年間、アンはケリンチの地に留まり、概ね、同居する家族と極僅かな数の人々と交流するのみの暮らしを送っていた。つまり、長期にわたり狭い空間で、似たような身分階級の人々との交流しか行わない閉塞した状況に身を置いていたのだ。下記が示唆するように、アンが失意の状態から抜け出すためには、場所を変えることや交際を広げる以外に方法はない。

... she had been too dependant on time alone; no aid had been given in change of place, ... or in any novelty or enlargement of society. (26)

ケリンチ屋敷からの転出に始まり、それ以降の連続して行

われる移動の都度、確かにアンには新たな人々と出会う機会がもたらされている。屋敷から離れて行くにしたがい、交流する人の数が増加するのみにとどまらず、その人たちの属する階級が様々な層に及んでいる点も挙げられる。アンは家族とは別行程で、いくつかの場所を経由して転居先のBathへと辿り着く。既にこの時点で、彼女が自身の家族や階級と離別する準備が着々と進んでいたのだと考えることが可能である。更に言うならば、家族と共に在った、もとの居住地も既に他人の住まう場へと変化を遂げており、もはや彼女の在るべき場所ではなくなっている。また、バースへ直接移動せず、他の場所を経由することにより、幅広い人的交流の機会を得る可能性が更に増す結果となった。

Her own spirits improved by change of place and subject,  
by being removed three miles from Kellynch: ... (41-42)

実際に僅かな距離の移動でも、アンに“improvement”がもたらされた。上記引用は、バースに到達するよりも、かなり手前までの僅かな距離の移動によってもたらされた結果を記すに過ぎないが、アンが置かれている状況を改善するためには、場所の移動が効果的に働くことが明らかになったと言える。また、ここで示されている以上の更なる距離の移動を行うことにより、なお一層の効果がもたらされるのではないかという期待までもが生じる。

バースへと歩みを進めるにしたがい、自身が属している階級とは異なる人々の集団が、アンに日常へと入り込む。また、ケリンチから離れるにしたがって、出会う海軍軍人の数が増加している。アンが物理的な移動をすると同時に、交際の幅が他階級にまで及び、未知の領域の観察と、旧知のものとの比較を行う機会を得ることにつながった。階級意識に縛られず、他の領域に属する人々との交流により、ただ前進するのみにとどまらず、アンは起こり得る危険を回避するための有益な情報を手にする機会にも恵まれる。アンが“nobody”(7)であることは、家族から離れて行動できる自由をもたらしている。家族から期待されることもなく、特に気に留められる存在でもないため、当然アン自身も、家族や階級意識に縛られておく必要がないわけだ。

特にバースでは、彼女はあらゆる階層の人々と関わり合う。「集まる人びとも以前と同じ」ではなく、「雑種混交の現象」<sup>9)</sup>を呈すると蛭川が述べている通り、バースは歴史的観点からも、もはや上流階級の人びとのみの場ではなく、大衆的な場所へと変容していた。このことは、2つの点で都合が良い。階級を含め、様々な種類の人々が多数存在する場所であるため、公的空間と私的空間の混在も当然起こり

得る。“nobody”であるアンにとっては、この状況に乗じてより流動的に空間を行き来することが可能となる。バースが他の場所よりも好都合を提供すると考えられる第1点目として、アンが様々な人々の生活を一度に目にすることができ、観察結果をもとに考察し、ものごとを判断する際の選択肢がもたらされる点が挙げられる。第2点目は、世襲の身分、すなわち、努力をせずとも生まれつき与えられている地位に甘んじている人々と、実力で生き抜く人々が一堂に会する場所であるため、両者の差異を直に感じ取ることが可能である点が挙げられる。バースの通りに視線を移せば、軍人たちが数多く見受けられるばかりか、活気に満ち溢れている彼らの様子を目の当たりにできる。つまり、上流階級の人々が安穏としておける時代が、もはや終焉を迎えようとしていることを予感させる効果を、バースの光景自体が示しているのだ。アン一家の者が鼻にかけ、絶対的なものだと信じて疑わない「階級」も、もはや身分の優位を保証するものではない。簡潔に述べると、多種多様な人々と出会うための場所として、尚且つ、場所自体が変化を象徴しているという意味において、アンを訪れる先としてバースが設定されていることは物語の上で効果的である。実際に、オースティン自身はバースに在住した経験があるため、この地に関しては詳しいはずである。作品中で、重要な意味を成す場面が描かれる場所として設定されているのは、架空の土地ではなく、バースやライム・リージスといった、実在する場所である。これは、その土地特有の性質を、オースティンが読者と共有していることに他ならない。

アンは、海軍軍人や貧しい暮らしぶりの旧友といった、明らかに自分とは異なる階級の人々とも、好んで交際を行っている。これは他者から勧められて行っていることではない。彼女が自ら望んで行っていることである。アンが関わるこれらの人々はそれぞれ、置かれた状況に自力でうまく対処する術を持ち合わせている。顕著な例として、病気のため動くこともままならないMrs. Smithが挙げられる。一見すると非常に惨めな境遇に置かれた人物であるが、彼女が“elasticity of mind”や、“power of turning readily from evil to good”(138)を持ち合わせていることを、アンは観察の結果、見抜いている。スミス夫人と自分とは明らかに生活圏が異なるが、アンは交際を止めることはない。したがって、夫人の居住空間へ通うことにも躊躇いはない。アンは、このような人々にあたたかい眼差しを向ける一方、階級意識に囚われ停滞している人々に対し、不快さや嫌悪感を示す描写がしばしば現れる。先にも示した通り、アンが好ましいと考える人々か否かは、肯定的イメージの表現が用いられているかどうかを手掛かりにすれば、容易に識

別することが可能である。

アンがケリンチを離れて新たに出会った人々は、身分階級に対する意識が希薄である。アンの父親や姉妹は爵位を盾に、周りの人々を見下しているが、彼らの方こそ、周りの人々から馬鹿にされていることには気付くことができない。実際に、身分階級に重きを置かない人々にとっては、見下される理由などはないのだ。バースにおいては、主に3種類の人々が登場するが、これらの人々に関しても、肯定的・否定的表現の使い分けにより、アンがそれぞれに抱えている印象が鮮明に浮かび上がる結果となっている。各種類の人々とは、「中身のない上流階級の人々」、「貧しくて困難な暮らしの中でも逞しく生きる人々」、そして「隆盛を誇る海軍軍人たち」を示す。アンは身内の者に対しても、はっきりとした評価を行う。“nobody”であると家族から見なされている者が、今度は逆に家族を評価する側になるという点は皮肉である。下記においては、他者の反応も交え、より客観的な評価を伴った描写がなされている。

...the door was thrown open for Sir Walter [Anne's father] and Miss Elliot [Anne's sister], whose entrance seemed to give a general chill. Anne felt an instant oppression, and, wherever she looked, saw symptoms of the same. The comfort, the freedom, the gaiety of the room was over, hushed into cold composure, determined silence, or insipid talk, to meet the heartless elegance of her father and sister. (198-99)

これは、アンの父親であるSir Walterと姉が、その場に集っていた人々にパーティーの招待状を渡すために登場した場面である。“heartless elegance”をまとう2人の登場のために、その場の活気が失われたことが読み取れる。“a general chill”に始まり、ここに現れる表現は全てネガティブなイメージの表現で統一されている。アンと同様、父親や姉もケリンチからバースまでの移動を果たしていることは確かであるが、爵位にしがみつくことに凝り固まっているため、自身で、自分が動くことの可能性を打ち消している。そのため、周囲の状況を理解することが不可能であり、変化に気付くことも、増してや、その変化を受け入れることもできない。その結果として、彼らはどこへ移動しようとも、自身の成長や向上を望むことはできない。

Medalieが“the class Sir Walter represents has grown moribund, unable to respond to changes in society or to be socially useful,”<sup>6)</sup>と述べているように、世襲の身分に甘んじている人々が停滞している様は、実際の歴史の上においても当てはまる。一方で、ナポレオン戦争で大いに功績を

上げた海軍軍人たちは、社会的地位を上昇させるに至っている。Persuasionでは、歴史的事実に沿う描写がなされている。Chapmanが“Austen would not write what she did not know.”<sup>7)</sup>と記すように、オースティンは、この作品に彼女自身が知る歴史上の事実を登場させている。そして、それをアンに体験させている。バースについても、先に述べた通り様相の変化を見せている。また、人々の社会的地位に関しても同様のことが言える。物語の現在である1814年と、その8年前では、ウォルター卿とウェントワースの置かれた状況は逆転している。一方は、財政状況に困難をきたし、より安上がりで体面の保てる生活を送っている身でありながらも、自らの置かれている状況をよく理解できずにいる愚か者である。対照的にもう一方は、地位も財産もない状態から身を立て、戦争での活躍により莫大な財産を手にし、海軍におけるCaptainの地位まで上り詰めた身である。この場合においても、無の状態から自らの手で何かを成し得た者と、生まれ持った財産を無に帰してしまった者の対比が明らかに示されている。当然、アンは後者よりも前者の方を好ましいと考える。

時の経過と共に、ものごとに変化が起こることは、蛭川やMedalieが示す歴史的事実において提示されている通りである。ここで、アンの移動が始まる前と、それ以降で、視覚的に明らかな変化を示したもう一つ別のものについても注目したい。“A few years before, Anne Elliot had been a very pretty girl, but her bloom had vanished early...”<sup>(7)</sup>、“...Anne haggard...”<sup>(8)</sup>という描写が表しているように、移動が開始する以前のアンの容貌は、芳しいとは言い難い様相を呈している。しかしながら、移動が始まって以降は、以前とは異なった様子が示される。移動開始以降のアンの姿に関する描写としては、次に示す3種類がある。

1. She was looking remarkably well; her very regular, very pretty features, having the bloom and freshness of youth restored.... (94)
2. Anne was improved in plumpness and looks.... (111)
3. ...Anne and her father chancing to be alone together, he began to compliment her on her improved looks; he thought her “less thin in her person, in her cheeks; her skin, her complexion, greatly improved—clearer, fresher...” (130)

1～3の描写は共通して、移動前に比べ改善したアンの外見を示している。1はウェントワースによる評価、2はRussell夫人による評価、3は父親による評価である。異なる三者が異なる場面で示した感想であるため、これらの評

価は信用できるものと見なすことができる。容貌の改善については、意図して達成できる事柄ではないが、視覚を通じて明確に認識できる変化であるため、移動に付随してもたらされたものであると考えることが可能な事象である。2と3の引用中で、共通して“improve”という表現が使用されていることに注目するならば、移動は先の引用で示した“spirits”、すなわち内面的要素のみならず、外面的要素に関してもアンに“improvement”をもたらすと考えることが可能である。家族の中では“nobody”であると彼女は見なされていたが、父親ですら気付くほど顕著に、彼女の容貌は変化を遂げていたと言える。つまり、彼女は実は“nobody”ではない存在であることを、家族も認めざるを得ない状況を迎えるつあることを暗示しているのではないだろうか。

アンは移動することにより、ものごとの変化の起こらない閉ざされた環境から抜け出すことに成功した。もともといた場所では、ほぼ一様の階級から成る集団との付き合いしかなく、ものごとを比較対照する機会もなかったため、「より良い」状態になったものや、好ましいと思える人々に出会うことすら不可能であった。上記で確認してきた通り、アンは移動を開始することにより、停滞した状態から離脱することができ、より幅広い交流や、望ましいものを得る機会に恵まれたと言える。

#### 4. ヒロインの行動の現れ方の変化

ケリンチ屋敷という狭い空間から始まる一連の移動は、より広い場所へと通じている。そして、移動が進むにつれて、アンは自身の真価が理解されない状態、或いは真価を発揮しにくい状況から脱し、大胆な動きを伴う行動を示すに至った。また、この移動は、彼女の真価を理解できる人々と出会う方向へ向かっていると考えることができる。移動開始以前の状況を考察した場合、アンには以前から潜在的に移動の準備ができていたと言える。このことの根拠として、次の4点が挙げられる。

1. 准男爵名簿に示されている通り、エリオット家にはウォルター卿以下に男子が存在せず、遠縁のエリオット氏が推定相続となっている。
2. 現在の状況を打破するためには、場所を変えることや交際を広げることが必要である旨が、引用した地の文(26)で暗示されている。
3. 他家に嫁いだ妹から声が掛かった際には、そこへ手伝いに訪れることが常となっている。
4. 毎年発行される海軍名鑑を暗記するまでに熟読している。

まず、上記項目1については、エリオット氏と結婚しない限り、アンがケリンチ屋敷に留まることは有り得ない状況であることを意味する。更に、スミス夫人との交流により、エリオット氏の本性が明らかになったという事実は、アンが彼と結婚する可能性を完全に排除する結果となる。したがって、ケリンチ屋敷、すなわちエリオット家に留まるという選択肢は用意されていないということになる。男子が死産であったことも併せると、ウォルター卿自身の家には、将来がないということを象徴しているのではないだろうか。

項目2については、アンの行動や移動の必要性が客観的な視点から述べられていると見なすことができる。また、この指摘を皮切りに、一連の動きが開始されていることを考えると、これは一種の啓示的役割を果たしているとも考えることも可能である。同時に、アンが「動く」ことには必然性があることを決定づけている。

次に項目3では、彼女の動くことを厭わない性質を表している。人に必要とされる喜びは、アンを“nobody”だと見なす父親や姉のもとに留まっていたのは味わうことが叶わない。そのため、動くことは自身にふさわしい居場所へと接近して行くことにもつながっている。声が掛かる都度、妹宅を訪れていることから、“nobody”であることの身軽さが示されている。

最後に、項目4で示されていることは、つまりのところ、ウェントワースの消息を追う行為である。彼女は想像の上で、彼と共に世界の海を航海していると言える。つまり、疑似移動を常に繰り返していると見なすことが可能である。

以上のように、もともと移動する準備が整えられていたところに、移動するきっかけが生じたことが組み合わされたため、必然的に動きが始まった。更に、移動先では出会った人々により、次なる動きや移動のきっかけが与えられた。また、行動することや移動することにより、その成果となるものがもたらされている。ケリンチ屋敷から離れるにしたいが、“nobody”と見なされていた者が、下記の通り、周りの人々の先頭に立つ頼りになる存在へと変化している。アンの動きは、もはや自身のみならず、他者にまで影響を与えていると言える。

“Anne, Anne,” cried Charles, “what is to be done next? What, in heaven’s name, is to be done next?” Captain Wentworth’s eyes were also turned towards her.  
“Had not she [Charles’ sister] better be carried to the inn? Yes, I am sure, carry her gently to the inn.” (99)

上記は、助言を求めてきた相手に直接指示を出すことにより、その相手を動かしている例である。もはや誰もアンの

ことを「言うことは何の重きも置かれ」<sup>8)</sup>ない“nobody”であるとみなすことはできない。勿論このことは、彼女の性質が“nobody”である状態から向上したという意味ではない。彼女の本質を正しく理解できる人々のもとへ、彼女が辿り着けたのだ。彼女の行動は、交際する人々に対して好影響を与えるのみならず、巡り巡って、今後彼女自身の身に降りかかり得る可能性のある害悪を回避するという結果をもたらしている。実際に、スミス夫人から得た情報により、アンは目標へ向かって前進することを阻む要素を排除するという結果を得た。

8年前に一方的に別れを告げられて以来、アンを許せずにいたウェントワースであるが、次に示すように自身の変化を認めるに至っている。つまり、アンは直接に指示を出さずとも、自らの行動により、他者に影響をもたらすまでに至っているのだ。

...he [Wentworth] was obliged to acknowledge that only at Uppercross had he learnt to do her justice, and only at Lyme had he begun to understand himself.

At Lyme, he had received lessons of more than one sort. The passing admiration of Mr. Elliot had at least roused him, and the scenes on the Cobb, and at Captain Harville's, had fixed her superiority. (212)

この引用は、彼がアン<sup>9)</sup>の行動を継続的に観察していることも明らかにしている。海軍名鑑をチェックし、彼の動向を観察していた側の者が、ここでは観察される側へと変化している。同時に、アン<sup>10)</sup>の行動自体も“疑似移動”と示したような空想上のものではなく、実際の動きを伴った物理的行動へと変化している。

## 5. 結論

当時、結婚は愛情とは関係がなく、ひとつの社会契約であると見なされていた。<sup>9)</sup>また、紳士階級に属する女性には、実質的に、結婚するか、家に留まるか、家庭教師になるかの3つの選択肢しか存在しなかった。<sup>10)</sup>当時の女性の結婚適齢期を過ぎた、比較的年齢の高い女性であることを併せて考えると、アンが未婚の状態を続けることは、相当の危険性を孕んでいるということになる。通念上、結婚することが、自分の居場所を確保する最良の方法であると言えるが、アンにとっての居場所とは、ただの場所ではなく、自分の意志にかなう場であるため、その他の場所は意味をなさないのだ。つまり、彼女の意志は社会通念に囚われないものなのだ。アンは、以下に示す2点を貫き通して

いる。まず第1点は、一貫してウェントワースへの思いを持ち続けていることである。8年前に彼と別れて以来、その後<sup>11)</sup>に再会できる保証すらない状態であつたにもかかわらず、アンは彼に対して変わらぬ愛情を保ち続けた。第2点目は、階級を意識することなく、他者と交流することである。エリオット家において“nobody”と見なされているのであれば、准男爵家出身であることに囚われる必要はない。様々な階級の人々との間を行き来することができるのは、“nobody”である身軽さがもたらした柔軟性が影響していると考えられるのではないだろうか。また、“nobody”であるが故に、社会的慣習に囚われず、自身の思いを貫くことが可能であつたのではないだろうか。現代の女性と同様には自由に行動や移動を行うことは不可能かもしれないが、ヒロインは強固な意志を貫き通す、しなやかさを持ち合わせている。慣習により行動に制限が加わる社会の中でも、彼女の行動は、更なる動きへとつながっている。

海軍軍人である夫と共にではあるが、クロフト夫人は陸を離れ、大海原を航海した経験があるということが下記に示されている。

“Women may be as comfortable on board, as in the best house in England. I believe I have lived as much on board as most women, and I know nothing superior to the accommodations of a man of war. I declare I have not a comfort or an indulgence about me, even at Kellynch-hall, ...beyond what I always had in most of the ships I have lived in; and they have been five altogether.” (62)

このことは、すなわち、アンもウェントワースの妻として、まだ到達したことのない場へと向かう可能性があることを示唆していると言える。

オースティンは、自分の知る範囲のみを作品に描く主義であるため、見知らぬ場所や未来の出来事は作品中に登場させていない。しかしながら、ヒロインが取った行動や考え方を辿ると、上記の範囲を超える準備や覚悟ができている状態であると見なすことは可能である。アンが新たな階級に属することを決めた時点で、彼女自身の留まることなく前進を続ける意志が、決定的に示されたと言える。准男爵という爵位を保持した家族の出身ながら、束縛のない“nobody”という存在であつたことは、アン<sup>12)</sup>の意思決定や行動に自由をもたらしている。

## 【注】

1. 例えば、中尾真理の「『説得』—Anne Elliotと‘an Elegance of Mind’—」(『奈良大学紀要 22号』, 1994, 33-48.)のように、移動した場所ごとに、ヒロインの言動を考察する研究が挙げられる。
2. 川口能久『個人と社会の相克』(南雲堂, 2011)をはじめ、ヒロインの存在感の希薄さに言及する研究者は多数である。
3. *Persuasion*からの引用は、全てAusten, Jane. *Persuasion*. London: Penguin, 1818; 1998からであり、引用ページは( )内に示す。

## 【引用文献】

- 1) Le Faye, Deidre. *Jane Austen*. London: The British Library, 1998, 65.
- 2) 大石和欣. 「Jane Austenの公共圏」. 東京: 日本英文学会『英文学研究 支部統合号12巻』, 2019, 110. ([http://www.jstage.jst.go.jp/article/elsjregional/12/0/12\\_109/\\_pdf/-char/ja](http://www.jstage.jst.go.jp/article/elsjregional/12/0/12_109/_pdf/-char/ja)) (2023年11月7日アクセス)
- 3) Jordan, Elaine. *Introduction. Persuasion, by Jane Austen*. Ware: Wordsworth Editions Limited, 2000, xi.
- 4) Austen, Jane. *Persuasion*. London: Penguin, 1818; 1998, 7.
- 5) 蛭川久康. 『バースの肖像』. 東京: 研究社, 1990, 206
- 6) Medalie, David. “‘Only as the Event Decides’; Contingency in *Persuasion*,” *Essays in Criticism: A Quarterly Journal of Literary Criticism*. 49.2, 1999, 152-69.
- 7) Chapman, R.W. ed. *Jane Austen, Jane Austen’s Letter to her sister Cassandra and others*. Oxford: Oxford UP, 1932; 1952.
- 8) 富田 彬. 『説きふせられて ジェーン・オースティン作』. 東京: 岩波書店, 1998, 9.
- 9) Southam, B. C. *Jane Austen*. Harlow: Longman, 1975, 35
- 10) Bush, Douglas. *Jane Austen*. New York: Collier Books, 1975, 7.